
結

多知夜麻尔 布理於家流由伎能 等許奈都尔 氣受豆和多流波 可無奈我良等皆

立山に降り置ける雪の 常夏に消ずて渡るは 神ながらとぞ

(立山に積もった根雪の、真夏になっても消えずに残るは、神の力か?)

万葉集



舞台は廊下から中庭に移った。

かつて、朱乃と共に弁当を食べた机の陰に隠れ、呉羽は《阿青》を迎撃する姿勢をとる。

だが、《阿青》は「よいいしょ」と見えない糸を跨いだ。

それは炭素結晶繊維を用いた罫だった。極めて細いために【空気】の流れにほとんど影響しない。その分、呉羽の『結界』にはひっかかりにくく、それ故に仙女対策に使ってみたのだが、彼女は文字通り格が違うらしい。

「あ、これで罫は最後？」

「……さてね」

「ついでにその散弾銃も粒状弾はもう残っていないんですよ」

「……っ！」

「駄目だよ。そんな顔に出しちゃ、【空気】が読めない馬鹿どもにもばれちゃうって」

そういって、《阿青》はケラケラと笑う。厄介なことにあの指摘は正しい。既に左手の散弾銃は残弾が零だ。右手の単体弾にはまだ残弾があるものの、どう考えてもこの女に一度に一発しか飛ばない単体弾が中るとは思えない。

「とういかさ、何で弾の残っていない散弾銃なんて後生大事に持っているの？ まさか、【空気】読みまくりのこのあたしが、弾が尽きていることに気付かずに牽制されるとでも思った？」

そして、《阿青》は右手をを右斜め上に向け、迷わず引き金を引いた。呉羽の方角ではない。あたかも、空中に向かって発砲した形になる。

すると聞いたことのない種類の音が響く。あたかも、火薬の爆発と金属の衝突が混じった不思議な空気の振動……。

「つれないな、ヤヒヤ。いきなりの挨拶がこれ？」

右手を挙げたまま《阿青》は嘆く。

呉羽の『結界』は今発生した現象を確かに捕らえていた。

そも戦闘空間が中庭になったのは偶然ではない。この中庭なら、三百メートルの——それは《阿青》の『結界』の外側であるかもしれない——距離から狙撃が可能だと打ち合わせていたのだ。

だから、呉羽は見事に誘導し、ヤヒヤーは正確に狙撃した。……したのだが、《阿青》は、——拳銃の弾で、ヤヒヤーの狙撃を迎撃しやがった……！
バーンと飛んでくる銃弾をバーンと撃ち落したのだ。

それだけでも、凄まじい事であるが、さらに絶望的な事実がある。

——《阿青》の『反応』には三百メートル級の狙撃すら通用しないって事ね……。

この女はミリ波レーダーと射撃管制装置FCSでも内蔵しているのか？ それこそ、人間大の攻撃ヘリだ。そして、その攻撃ヘリは

「ねえー、ヤヒヤー、お話、聞いてってばー」

と大声で叫んだ。が、返答はない。何しろ、ヤヒヤーは三百メートル先にいる。怪物そのものな《阿青》にすれば、目と鼻の先なのかもしれないが、人間であるヤヒヤーにすれば、まともな会話を行える距離ではない。

「あつ、そうだ」

と、何やら思いついた《阿青》は左手を呉羽の方に差し出した。

「それ、あたしに借してよ」

彼女は呉羽の持っている通信端末を要求してきた。これを使えば、ヤヒヤーと無線で話ができるから。

「空気が読めるって、話が早くていいわ。ね、お願い」

可愛らしく小首を傾げられても、呉羽としては嘘っぽくしか見えない。

「——そっちにとっても、時間稼ぎになるでしょ？」

その一言で呉羽は諦めた。この調子だと罫を仕掛けても無駄なので、言われるがままに通信端末を投げ付ける。

それを受け取った《阿青》はしばらく考え込んだ。どうやら、呉羽と同じように機械は苦手らしい。何度か操作を間違えた後、ようやくヤヒヤーとの回線を繋ぐ。

「はい、ヤヒヤー。お久しぶり。髭は剃りなって、あれほど言ったのに」

『《九天玄女》か……』

ヤヒヤーは彼女の事をそう呼んだ。呉羽も戦闘中は鋭敏になるため、嫌でも耳に入る。

「あら、昔みたいに『先生』って、呼んではくれないの？」

『黙れ……』

「ええー、ヤヒヤーってば反抗期？ お姉さん寂しいよ。昔は親御さんが止めても、塾を休んでいつもあたしのところに来てくれたのに」

『黙れというのが聞こえんのか！ アバズレ！』

正確に《阿青》の四肢を貫いた——ように見えた。だが例によって、次の瞬間には、彼女は回避行動を終えている。そこに合せて、呉羽も残弾零の銃身を投擲し、さらの単体弾スラッグを発砲。だが、やはり当たらない。

——駄目だ。やっぱり、飽和攻撃には至らないっ！

粒状弾ペレットを使い切っていることがつくづく悔やまれる。あとはヤヒヤーが何とかして、『結界』の外側から狙撃できることを期待するしかない。

そんな呉羽の苦悩を《阿青》は嫣然と一瞥し、その後、より重大な脅威たりえる遙か彼方のヤヒヤーへ視線を変える。

「いいよ。また、可愛がつてあげる。いや、実際、あたしもあなたのが忘れられないの。

デキの悪い連中じゃ、代わりにもならないもの。……久々にイかせてあ・げ・る」

その現象は、貧弱な『結界』しか持ちえぬ呉羽にはまるで反応できなかった。

より、強力な『結界』を持つ《阿青》だけがかろうじて反応しえた。

それは驚愕の表情だった。

——Superior Hybrid Interceptor/Superseded Hybrid Irregular:Omitted Unit.

——SHISHIOU-system_Ver. 9. 09KSafe-mode/Condition, green. get set!

『死ぬのはあんたよ、この尻軽』

冷たい朱乃の声と共に《阿青》の黒髪は打ち抜かれた。

——外した。

と朱乃は舌打ちした。打ち抜いたのは黒髪だけで、彼女の肌には傷一つない。

もつとも、生まれて初めての狙撃にしては上出来かもしれない。この時の朱乃は知る由もなかったが、呉羽の放った最高の一撃ですら、《阿青》の髪を掠めただけで、まともに打ち抜いたわけではないのだ。

『どうして……朱乃ちゃんが……』

ヤヒヤー経由で送られてくる《阿青》の呻きは二重、いや、三重の意味での『どうして』だったのだろう。

第一に『どうして』素人の朱乃が狙撃を成し遂げる事ができたのか？

第二に『どうして』そんな素人の狙撃を《阿青》が見逃してしまったのか？

そして……実に腹立たしいことが——

第三に『どうして』朱乃は《阿青》を撃ったのか？

——というものもあったのかもしれない。

これらの疑問に対する答えは一つだ。

「現役女子高生を舐めないでよね」

朱乃がヤヒヤーに行った提案は二つ。

提案1…《阿青》に対しては設置型の罠の類が有効なのは？

提案2…朱乃自身が罠わなになるとしたら？

まず、ヤヒヤーは提案1に対し首を横に振った。

——「罠の有効性については、俺も想定し、既に試行し、一定の効果を確認している。今回も幾つか仕掛けている。だが、仕留めるには至っていない」

素人の浅知恵——そんな悔しさが朱乃を襲った。

——「あの女が把握しているのは、あくまでも人間の動きが中心だ。自動的に作動する機械装置の類を初見で見切ることではない（『経験』を重ねることによるパターン認識は早い）。しかし、機械システムとは、結局、設置するのも、起動させるのも——そも最初に発明するのも人間に依存している。機械システムそのものから直接【空気】を読み取ることができない以上、反応は遅れるが、人間の手が介在している以上、間接的に【空気】を読まれてしまう」

長々と語るヤヒヤーは『着眼点は悪くない』と慰めていたのかもしれない。ところが彼は『だが』と続けた。

——「だが、気になるのは君が罠になるという提案だ」

——「……これも《阿青》には無意味かしら？」

——「それはわからん。それよりも君は罠になるということをどう考えている？」

——「危険だって事？」

——「それもあるが、それ以上に……」

と、ここでヤヒヤーは軍人というよりも哲学者としての一面を垣間見せた。戦術的な好機や道徳的な義務より、純粋な探究心を優先した。同時にそれは《阿青》が抱いた三番目の『どうして』でもある。

——「……君があんな女を殺す手助けをする理由が俺にはわからない」

——「あの女は社会にとって有害よ。今すぐ、外科手術的に除去すべきだわ……絶対に」

——「……それが動機か？」

——「ええ。これは市民として当然の義務よ」

射るような視線のヤヒヤーに対し、朱乃は目を逸らしていた。それでなくとも、呉羽にすら伝えていない心情を吐露した相手だ。その意味するところはわかっているのだろう。何より、利害が一致したらしい。

彼は『わかった』と言ってくれた。

——「わかった。案件Aの破棄を撤回し、その役割を君に一任する。そうすれば、俺が担当

するMと並列して進めることができる」

そういつて、彼は目標座標と作業手順とをまとめた携帯端末を渡してくれた。

——「AとM？」

——「オートマッチックとマニユアルさ」

彼の言った自動とは『(弾丸の) 自動装填』という意味ではない。『(照準の) 自動調整』という意味だった。

指定された座標には、呉羽とヤヒヤーが乗ってきた箱車ワンボックスカーが置いてあった。渡された電子鍵で開錠し、中に乗り込むと『機械仕掛けの獅子舞』とでも評すべきものが鎮座していた。

大きさはヒトの肘から先をすっぽり覆う程で、鬣たてがみを思わせる多数の放熱素が伸びていた。さらに獅子のに当たる部分に銃口が光っていた。

その名はシシオウシステム (SHISHIOU-system_Ver. 9.09YSafe-mode)。

電腦制御によるある種の自動狙撃システム——その最新鋭試作機が用意されていたのだ。

『朱乃、これならいけるわ』予備の端末を使って、呉羽が声をかけてくれた。どうやらこの調子なら、『阿青』を追い詰められるらしい。『あと、ヤヒヤー、朱乃に銃を触らせたことについては……』

『ああ、好きなだけ殴れ』

無論、実際の朱乃はシステムと接続した市販端末を操作しているだけだ。銃身には一切触れていない。端末からの鍵盤キーボード入力を制御中枢が処理し、照準を特殊な人工筋肉が自動調整した上で、純粋な電気信号で発砲する。それがこのシステムの特徴であり、素人の朱乃でも狙撃を成し遂げられた理由であり、人の手が直接関わっていないという点で『阿青』が【空気】を読みにくい原因だった。

その上、この最新型シシオウシステムは今朱乃がいる車内からの直接狙撃を可能にしている。

これは誤植ではない。この時、ヤヒヤーは屋上からの狙撃を行っている。重力の影響を考慮して、なお、高地からの狙撃を敢行しているのは、言うまでもなく遮蔽物がある故だ。

だが、この最新型シシオウシステムは、遮蔽物の影響を無視できる。ヒトの手によらない運用を前提とした銃身は、破格の性能を実現した。故に、そこから加熱投射された超高密度超質量特殊弾頭は、多少の障害物は平気で貫通するのだ。

……そんな高密度な弾頭って、ウランみたいに核分裂するんじゃないのかという甚だ聞き難い疑問が脳裏をよぎったが、同時に

——ああ、重い弾丸って、これの事なんだ。

という納得もあった。実際にはヤヒヤーが手動マニュアルで発砲している7.62mmの弾丸がいつもよりも重い種類であるという意味もあったのだろう。

だが、根が文系な朱乃はもっと感傷的な気分になる。

——重い弾丸は……重い意思是……『空気』に妨げられたりはしない。もっとはつきりとし

た『障壁』だって撃ち抜ける。軽い『空気』が幾ら分厚く道を遮ろうとも、その重ささえあれば、軌道を曲げずに真っ直ぐ飛んでいける。

気分が高揚していた。この戦果は朱乃というよりもシステムによるものだ。そのシステムが効力を発揮しているのは、呉羽が《阿青》を誘導してくれたからだし、ヤヒヤーが自らも狙撃を行いながら、その《阿青》の観測情報を朱乃の元に送信してくれるからだ。

しかし、電気信号の引き金を引いているのは朱乃だ。

ヤヒヤーから送信された観測情報と、システム本体からの探査情報を、統合処理し、肉眼では視認不能な《阿青》の正確な座標を割り出しているのも朱乃だ。

「私は、文学少女で……！ 数学が苦手で……！ 物理が苦手で……！ 機械オンチで……！ でも……！」

多分、成長とは己の無力を知ることなのだ。

だが、朱乃はまだ若い。心のどこかで己の力を信じている。自分が世界を変えられると思っている。同時に、それが幻想であり、錯覚に過ぎないと理解できるほどには大人である。

だから、もつと歳を重ねば、もつともつと己の無力を思い知ったら、いずれはああなるのかもしれない。

——でも、まだまだ。私はまだ……

「……私はあんな風に小さく纏まったりはしない。私は世界を広げる人間になりたい」

——いける……いける！

朱乃は自分をこの学校に入れてくれた両親に心底感謝していた。

優れたシステムとは一握りの選良者や熟練者^{エリートベテラン}だけではなく、一人でも多くの人間に使えるシステムのことである——というヤヒヤーの思想は狙撃システムにも反映されており、その機材は素人でも使い易いものが中心だった。

だが、それは『素人でも使い易い』のであって『素人にも使える』ではない。

まともなGUIもない状態で、未知のOSを操作し、必要な情報を入力していかねばならない。それも限られた時間で、試行錯誤を重ねるゆとりもなく——それは失敗した経験を活かして——という帰納的手法が通用しないということだ。

経験でなく論理で、帰納ではなく演繹で、あの仙女たちとは逆の手法でやらなくてはならない。

——「実際、呉羽にこういう作業は無理だろう。だが、君ならできる」

ヤヒヤーはそう断言した。『君にもできる』ではなく『君ならできる』と明言したのだ。

——ありがとう、川添先生！ あなたの三角関数は素晴らしかった！ 糞つたれ、村井先生！ 貴様のニュートン力学は適当すぎるんだよ！

今時珍しいくらいに謹厳な数学教師に感謝しつつ、生徒受けはいい物理教師の授業内容を侮蔑し、朱乃は発射準備を整える。

『Superior Hybrid Interceptor/Superseded Hybrid Irregular:Omitted Unit.』

『SHISHOU-system_Ver.9.09*Safe-mode/Condition, green. get set!』

朱乃は己の舌で唇を湿らせた。

時間の感覚がなくなっていたが、どうやらもう朝らしい。

夜明けの——日の出の光が瑩窟学園を朱乃がよく知る姿へと変えていく。

「さあ、《鶴》退治の英傑に与えられた大太刀の力——今一度ここに……！」

震える指でENTERを叩く。そして。

液晶画面が不快な赤に切り替わった。

「エラーっ？」

弾丸が発射される気配すらない。画面に説明が次々と表示されていたが、英文なので、よくわからない。はつきりしているのは深刻なシステムエラーが発生し、この歪な獅子舞に見える機械の塊は、只の歪な獅子舞に見える機械の塊に成り下がったということだ。

——ヤヒヤー・イブン||ザカリヤーの馬鹿っ、何がシステムの最新試作機よ。そんなもの危なっかしくて、使えるわけがないでしょう！ 前の版バージョンなら、信頼性も確立しているというのに……！

実際には、ヤヒヤーも同じことを考えたからこそ、この案件 オートマチック A を真っ先に破棄し、動作が確実な案件 マニュアル M を優先したのだろう。しかし、この時の朱乃は罵倒の一つや二つを口にした気分だった。

——い、いえ、まだエラーよ。バグではない。

そもそもハードではなくソフトの問題だっただけましである。

そう考えて、朱乃は設定を一つ一つ確認していく。が……。

「……駄目だ……」

どう考えても、朱乃の手には負えない。次弾発射のためには、システムそのものを再起動させるしかない。しかし、そんな時間は……。

『落ち込むことないって、朱乃ちゃん。正直冷やりとした。初めてにしては上出来だよ』

朱乃の絶望は【空気】として伝わった。《阿青》は途端に元気になって、慰めてくる。

『あなたに撃たれたのは残念だけど、むしろ、より魅せられちゃったって感じかな。童貞一つ捨てるのに散々躊躇ったヤヒヤーとは大違い。うん、あたし、あなたの半身にきつとなってみせるから——』

甘く甲高い《阿青》の声が実に不快だった。

同時に——結局、ここまでののだという絶望が朱乃を再び支配する。どうせ何をやっても無駄なんだ。頑張れば、頑張っただけ、思い知らされるんだ。何もできない。誰も救えない——

自分自身ですら！

「それは違うよ」

どこかで誰かの声がする。

『……朱乃——システム再起動をしての第二射までにどのくらいかかる？』

その声の主は呉羽に似ていた。正気を取り戻した朱乃は急いで定量的な数字を割り出す。

「五分……いえ、いくつか近道ショートカットできるところを見つけたから、三分あれば……」

『そつ、じゃあ、それまであたしが足止めするよ』

呉羽はあつさりと答えた。《阿青》は眉を顰める。

『正気？ この条件じゃ、あなたは三分どころか、一分だって持たないわよ』

どうやら《阿青》に呉羽を見逃す気はないようだ。朱乃が《阿青》の立場でも同じ事を考えるだろう。今回、《阿青》は追い詰められた。これ以上、仙女の情報をヤヒヤーに渡して、自身の危険を招くつもりはないのだ。《阿青》は呉羽だけでも確実に仕留めておく。

『だから、その初期条件を変えるのよ』

『変える？』

『……朱乃、あたしの幼馴染の話はしたわよね？』

『何の話？』と《阿青》が尋ねる。

『……悪の秘密結社に改造人間にされたんだってさ』

朱乃が正直に答えると、《阿青》は眉を顰めた。

『あの時、言えなかったけど……、あたしの幼馴染が休学して、退学する羽目になった事件。本当はあたしも少しだけ関わっていたの……』

ぼつりぼつりと呉羽は昔語りを始めた。

『本当に少しだけだよ。幼馴染が事件に巻き込まれた時、あたしの家にやってきたの。「助けて」とは言われなかった。「力を貸して」とも言われなかった。ただ、「何日か泊めて」と頼まれただけ。とんでもない事件に巻き込まれていたのに、その幼馴染は信じられないくらい謙虚だった。お金まで渡そうとしたぐらいなんだから。多分、あたしが断れば、すぐに別の宿を探したろうし、宿を借りる以上のことは要求してこなかった。もつとも、それ以上のことがあたしにできたかという疑問なんだけどき。……あ、そっか、だから、それ以上の事は何も言わなかったんだ』

呉羽は少し涙声で、乾いた笑いをもらし、『あの一件であたしが被った被害と言えば、その後、警察の事情聴取で二、三日拘束されたぐらい。しかも任意』と投げやりに付け加えた。

『あたしさ、その幼馴染のことがずっと好きだったんだ。多分、恋心だったと思う……』

『はい、一分経過……』

『でもね、その幼馴染が苦しんでいる時、あたしは何もできなかった』

『……姑息な時間稼ぎね』

そう判断した《阿青》は呉羽に襲い掛かった。実際、それは間違いではない。朱乃もその可能性を考えながら、システムの再起動を始めていたのだから。

『誤解しないでね。怖かったわけではないの。いや、怖くないといえば、嘘になるか……。でも、それ以上に弱かったの、力も心も——酷いよねえ。あたしはその幼馴染に無力を非難されることすらなかった』

呉羽は柳の如く揺らめていた。その流れる動きであらゆる攻撃を躲す——のが本来のあり方なのだろう。だが、仙女として格上の《阿青》には通じない。呉羽は致命傷こそ避けているが、手刀でどんどん血まみれになっていく。

しかし、それでも呉羽は言の葉を紡ぎ続ける。

『まあ、当然だよ。あたしには何もなかった。ただ、ちょっと勘が良くて、体が頑丈だっただけ。小さい頃はそれでも十分だった。小学校の低学年の頃までかな？ あたし、餓鬼大将だったんだよ。成長が早かったから、何にもしなくても、試験では百点取れたし、誰と喧嘩しても負けなかったからさ。』

その幼馴染に出会ったのもその頃、虐めっ子に虐められてエグエグ泣いていたのをあたしが助けてあげたの。

私の幼馴染はさ。小さい頃は凄いいき虫で、いつもあたしの後ろを付いて来ていた。初めは煩わしかったけれど、すぐに仲良くなったよ。だって、あたしはその幼馴染のことが好きで、その幼馴染はあたしのことが大好きだったんだから。それこそ、結婚の約束までしていたくらいにね』

……ずっと前から、朱乃には気になっていたことがあった。

——呉羽はその《幼馴染》のことを一度も名前と呼んではない。

それどころか『友達』とも『恋人』とも呼んでいない。いや、正確には友と呼んだ事があつたが、その時は必ず過去形だった。当初は本名を挙げると厄介なことになるのかもしれないと、邪推していたが……。

『教えてあげる——あたしはその幼馴染を幼馴染としか言っていない理由はね、本当はあたしたち、別に仲良くはなかったからなの。だから、幼馴染以上の何者にもなれなかった』

——でも、結婚の約束までしていたって。

『言ったでしょ？ それは本当に小さい頃のお話』

呉羽は聞こえないはずの朱乃の心の中の声に答えた。あるいはこれが空気を読むということなのかもしれない。

『歳を重ねると、そうもいかなくなってくるよ』

呉羽の成績は下がっていった。喧嘩でも男子には敵わなくなってきた。

『だけど、あたし、安心していったんだ。自分がこの広い世界の中では矮小な存在でしかないという現実、あたしただけではなく、万人に共通する普遍法則だもの。幼馴染だって、例外では

ないはずだって』

それが『必然』だ——と朱乃は思った。

小等部で一番だった人間も、中等部で一番になるのは難しい。中等部で一番だった人間も高等部で一番になるのは難しい。……そう、成長とは己の無力を知ることなのだ。

『だから、勉強をサボったり、面倒ごとからはすぐに逃げ出していた。当然、ますます成績は下がったよ。意地になって誰かと喧嘩することもなくなった。でも、それだけじゃない』

気が付いたら、呉羽は周りの機嫌ばかり伺っている女の子になっていたという。

朱乃はプールでの呉羽の言葉を思い出した。あれが彼女の処世術だったのだろう。全力を出せば、周りから煙たがられる。だから、全力は出さない。

己の道を歩けば、人は離れていく。だから、人の後ろばかり歩いていく。

朱乃には理解できないが、どうやらそれが呉羽の生き方だったらしい。

しかし、呉羽の幼馴染はその対極の道を歩んでいた。

『その幼馴染はね。何事にも真面目で一生懸命だった——ずっとね。そんな様子を陰で嘲う人も多かった。ていうか、ぶっちゃけた話、そういう人たちが学級の主流』

『決定打に至らない？』と手刀を繰り出し続ける《阿青》は訝しむ。『今までは力を抑制していたということ？』

『でも、その幼馴染はそんな私にはないものを持っていた』

血塗れになりながらも呉羽は笑っていた。

それは千年の間、人に犯されなかった未踏の霊峰の如く——。

日本地図最後の空白地点とまでなった神山の加護の如く——。

『世界を変える力。与えられた初期条件を捻じ曲げようとする心。己の有り様を自らに由って、決定せしめんとする意思——本当の自由。この学校の先生が言ってたでしょ。自由はこの宇宙で人間だけが持っているものだって』

——……呉羽は？ 呉羽はその時どうしていたの？

『あたし？ あたしはね、あたしは学級のオトモダチの周りで、その幼馴染の陰口を披露していた。そうすることで、その人たちの仲間として認められていたの』

——……。

『……ま、たしかにその幼馴染のひたむきさはたしかにちょっと無神経でもあったしね』

——無神経？

『あたしと違って、あのコは【空気】を読めないのよ。いや、あえて、読まなかったのかな』
中々倒れない呉羽に《阿青》は一度距離を置いた。

『いずれにせよ、あたしはツケを払わされた。その組織に追われている時、大昔、イジメめつ子に虐められている時みたいに、その幼馴染は私のところにやってきた。でも、あたしは何もできなかった』

当然だ。何もしてこなかったのだから。澱んだ【空気】を読むだけで、それを換えようともせずに、ただ従うだけだったのだから。

だが、呉羽は小さく呟いた。
「でも今は違う」

その黒髪をかき乱し、《阿青》は「黙って聞いていれば」と、苛立ちを露にしていた。色々とうろたひいた女ではあったが、その時の怒りは本物だったと思う。

「世界を変える力？ はっ、驕りが過ぎるわ。戦乱ゆえに銃弾に当たって死ぬ兵士や、貧困ゆえに子供を飢え死にさせる母親に向かって、『自助努力が足りん』とほざくつもり？ 小さな人間の力なんて、この大きな世界の力の前では、川に落ちた葉っぱみたいなものよ」

「……その通りだと思う。でも、その大きな世界というのは、人間のような至小いじさき者たちの集まりなんだ。世界を形作っているのは、あたしのような人間を含めた有象無象なんだ。貴様がいう大きな世界の力というのは、実のところ、小さな人間たちの力なんだよ」

女は嗤う。汎神論者とは思わなかった。それでは先ほどの自由意志についての言説とは矛盾するのではないか？ それに、それではあのコヤココとはソリが合わないでしょう。

それらの指摘に、呉羽は一切答えなかった——答えられなかった。

「第一、それが死んでいく者たちにとって、慰めになるの？」

「……今、生きているあたしたちには意味がある」

「亡者はただ忘れ去られるのみ——実に無慈悲ですこと」

むしろ、嘆くような面持ちで《阿青》は吐き捨てる。

「朱乃ちゃんには言っておくわ」《阿青》は囁いた。どうして、それが朱乃の耳にだけそれが届くのも最早不思議ではないだろう。「この二人に殺された連中はね、股を開かなきゃ見向きもされない能なしブスのヤリマンから生まれた連中だった——でもだからこそ、生きるために必死だった。それだけは間違いない」

……この時、既にシステムの再起動が完了していた。

だが、朱乃はすぐには引き金を引けなかった。まともに発射しても回避される恐れが高い。ヤヒヤーの狙撃が中断されているということは好機を窺う必要があるのかもしれない。あるいはもっと別の理由が朱乃の指を封じていた。そして……

その時、割れた窓から、中庭へと風が吹き込む。
空気が乱れる。

そのせいか、調息していた呉羽の飾り布が弾け飛んだ。

それは多分ただの偶然だったのだろう。

束縛を解かれた彼女の髪は虚空にたゆたう。

「え？」

その一連の流れにふと朱乃は疑問を覚えた。しかし、その疑問は次なる変化にかき消される。たゆたう髪は光の反射の有り様を変えたのだ。

光と風が織り成す色のうつろい。それが呉羽の日に焼けていた髪をさら染め上げていたのだ。

あるいは日の暮れは夕焼けの如く――。

あるいは夜の明けの暁の如く――。

「……M c i r (メラノコルチン一型受容体) 遺伝子変異者？」

口笛が《阿青》の唇から放たれる。実際、その髪は現行人類において最も希少な彩りを帯びていた。

――いや、違う。そんな劣性遺伝の産物ではない。

あ・の・呉・羽・の・髪・は・朱・乃・と・同・じ・赤・毛・な・の・だ。

朱乃の脆弱さの証たる赤毛のように、呉羽の髪もまた光に染まっていったのだ。

呉羽もまた朱乃と同じ弱さを抱えているのだと思いたかった。

そして、あの一瞬の現象――普通に考えれば、風で呉羽の飾り布が解けたと考えるべきだろう。

しかし、実際には呉羽の髪が蠢いた……ように見えた。

髪が蠢いたから、その飾り布が解け、風が吹いた……ように思えた。

まさに相関としては正しいが、因果としては逆な現象である。

事実ならば、奇跡だ。

だがそれも、小さな小さな奇跡に過ぎない。

それこそ、風が吹けば散ってしまう儂い一枚の葉に過ぎない。

それはあまりにも皮肉な暗喩に思える。

弱者とは受身なものだ。

呉羽たちは世界のうつろいを感じる事ができる。この宇宙の事象の流れをほぼ完璧に読み取ることができる。

だが、それだけだ。読み取るだけだ。次に起こることがわかっている、それを変えることができないのだ。

しかし、それでも……。

「あたしは山の育ちでね。だから、見てきた」呉羽は黄昏に映え秋色に満ちた姿で語る。「葉緑素を失い、光合成をできず、大木から切り捨てられた死んだ命の欠片が――朽ち果て、枯れ果て、《紅》に染まってしまった小さな《葉》が――積み重なって、川の流れを変えるところを！」

楓ならざる栂の如き呉羽は己の真名を叫んだ。

「我が名は《紅葉》――国津越妻祇万幡豊太刀山紅葉媛命、参る！」

「はっ、所詮は国津神——そこらの妖怪妖孽妖精と変わらぬ小娘が、この天帝直属いくさめがみの戦女神に挑むなど！」

九天の悉くを玄く染める髪を振りかざし、女は答える。

「我が名は《阿青》——九天玄女《越處女》阿青……！」

仙女の声が響きあつた直後、《紅葉》は残っていた散弾銃を投げ付ける。

当然のように《阿青》はそれを薙ぎ払う。が、次の瞬間、その《阿青》の懐に《紅葉》が潜り込む。

「ここにきて、近接格闘？——本気で足止め狙いつて事？」

「ペラペラペラペラと……田舎の土地神を舐めるなよっ！」

数合、白打の応酬を繰り返すが、やはり、《阿青》には届かない。《紅葉》の肌に血が流れるのみだ。

ヤヒヤーはまだ撃たなかったが、朱乃はもう限界だと判断した。

『Superior Hybrid Interceptor/Superseded Hybrid Irregular:Omitted Unit.』

『SHISHOU-system_Ver. 9.09*Safe-mode/Condition, green. get set!』

ほぼ同時に《紅葉》は渾身の正拳突きを《阿青》に向ける。

朱乃がENTERを押す。システムは正常起動。超高速で特殊弾頭が発射。

その一撃は『空気』はおろか『障壁』すら貫いて、まっすぐに《阿青》へと向かう。

そして、ぽっと、赤い花が咲いた。

紅葉もみじのようだ——と、朱乃は思った。

ギリギリで《阿青》の手刀が《紅葉》を貫いていた。

自慢の黒髪が虚空を漂う。《阿青》が二人の少女の攻撃を共に回避できたのは僥倖といっている。もう一度やれと言われても無理だろう。ただでさえ、朱乃ちゃんの一撃は読みにくいのに、

今回は《紅葉》の動きまで神憑っているのだ。……それも文字通りの意味で。

狙撃でその黒髪の多くを失っている《阿青》に次はない。

だからこそ、残りの髪を犠牲にしても、朱乃ちゃんの狙撃を紙一重で躲し、返し技で《紅葉》の下腹へと手刀を走らせた。

危険な賭けだった。

そして、《阿青》はその賭けに勝ったのだ。

——それにしても、呉羽ちゃんの中って、素敵。あ、これってば、子宮？

少女の顔が苦痛に歪む。

朱乃ちゃんにも再びの焦燥が芽生えていた。今の狙撃にしくじったというだけではない。狙撃システムに先程と同じエラーが発生したらしい。どうやら、露骨に再現性のあるエラーらしい。人工知能で解析するには《阿青》の動きが特殊すぎるのだろうが、一発撃つ度にこれではヤヒヤーが自分で使う気になれなかったのも無理はない。

そのヤヒヤーが時間差で狙撃をしてくる。

これまた冷やりとする軌道だ。どうもこの《紅葉（呉羽）》の格闘とヤヒヤーの狙撃の組み合わせまでが、《阿青》が余裕を持って処理できる限界らしい。そこに朱乃ちゃんという不確定要素が絡むと、今回のように『躲す』ではなく、『外れることを祈る』しかなくなってしまう。実際、朱乃ちゃんの一撃を躲し、《紅葉》に反撃を行った時点で、《阿青》の肉体はもう限界だった。これ以上の攻撃を捌くのは無理だ。それを狙ってのヤヒヤーの狙撃なのだろう。

——でも、この狙撃の軌道だと《紅葉》ちゃんの方に当たっちゃうわよ。

やむをえない誤射だ。何しろ、《紅葉》も《阿青》も仙女として動き回っていた。只人には目で追うのが精一杯だろう。その上、《紅葉》は《阿青》にギリギリまで接敵しているのだ。

足止めのためとはいえ、これでは誤射を誘っているも同然だ。ヤヒヤーも本来はこんな危険な狙撃はしない。だが、この格闘戦を傍観していれば、確実に《紅葉》は死ぬ。既に《阿青》は王手をかけているからだ。故にヤヒヤーも賭けに出ざるを得なかった。そして、失敗した。仕方のない失敗だ。

だが、ヤヒヤーは自分を許せないだろう。

朱乃ちゃんはそれを許さないだろう。

そんな光景——既に確定している未来——に思いを馳せるとキュンとなる。

その時だった。

偶然、風が吹いた。

馬鹿げている。偶然？——そんなものはこの世にはない。理神論者であり決定論者である自分にとっては、尚の事だ。実際『結界』はこの気候で、この瞬間に風が吹くことはないと主張していた。気象学者ならば、「この程度の風はいつでも吹いてもおかしくない」という程度の風だ。しかし、次世代型地球シミュレータのハードウェアに等しい『人間の頭脳』とそのソフトウェアを遥かに上回る『仙女の結界』を併せ持つ《阿青》には断言できる。

風が吹く事はない。

しかし、風は吹いていた。しかも……。

——風がヤヒヤーの狙撃の弾道を捻じ曲げているっ！

嘘だ。嘘だ。そんなことはありえない。

強風が銃撃の軌道に影響するのはよくあることだ。近距離ならば、それは数ミリ程度の些細なものだが、長距離では一メートル近い甚大なものになる。だから、ヤヒヤーのような狙撃手は強風の日の狙撃を嫌がる。だが、この時はむしろ風がヤヒヤーに幸いした。《紅葉》に直撃す

るはずの銃弾が、突風で軌道を変えていたのだ。それどころか、この軌道は……

——知っている？ 『最後の一片』The Last Leafはしぶといんだよ！

——こんなのイカサマっ！

よく考えれば《阿青》が手刀で《紅葉》を仕留められなかったことが、そもそも、おかしかったのだ。これまでも《阿青》はこの《紅葉（真羽）》の心臓を十個は抉っていたはずだった。それが『必然』なのだから。その『必然』を読み取った《阿青》は確実に命を奪う手刀を繰り出していたのだから。それが初期条件で決まっているのだから。だが、この《紅葉》は……。

——それを書き換えていたんだっ！

この《紅葉》は、受動パッシブではなく、能動アクティブだったのだ。【空気】を読み取っていたのではなく、【空気】を書き換えていたのだ。

ようやく気付いた。《紅葉》の周囲の情報量が増大、いや、自己増殖している。だから、あたるはずの手刀があたりず、つぶれるはずの心臓がつぶれなかったのだ。

ありうるべからざる『法則』が、ありうるべからざる『空気』が、ありうるべからざる風を呼ぶ。

それはあくまでも微視的な現象であり、巨視的には非力である。今の風とて、銃弾の軌道を数センチずらしたに過ぎない。普段の《阿青》ならば、予想外であっても確実に回避していただろう。だが、この時の《阿青》にそんな余裕は……。

そして、再び赤い花が咲く。

右肩に一発食らってから早かった。

綺麗な構えで《紅葉》は掌底を放ち、《阿青》の脊髄を打ち貫く。

運動神経が麻痺したところに、遅れて銃声がやってくる。超音速の弾丸なのだと理解するまでは、時間がかかった。

ヤヒヤーだ。さらに続けて三発、しかし、正確な狙撃。

計四発で《阿青》は両手両足を綺麗に射抜かれた。

これではもうまともに動けない。それどころか、音速を超える弾頭の直撃は《阿青》の循環器系をずたずたにした。仙女の力をもつてしても、出血が止まらない。生体恒常性ホメオスタシスが完全に破壊された。

それでも、脳や心臓に傷はないから、即死ではない。

しかし、緩慢だが確実な死が《阿青》の『必然』となった。

「……苦しんで死ぬ……ということ？」

膨大な苦痛の中、《阿青》はやっとの思いで言葉を紡ぐ。

それに対し、少女は冷たく答えた。

「違うわ。一人ぼっちで死ねということよ」

腹から血を流している呉羽の姿に、朱乃はすぐに走り出そうとした。反射的にヤヒヤーが制止するが、呉羽は【空気】を読んだのだろう。すぐに「問題ない。もう、敵性の気配はない。というか、あたしがまずいので、早く手当てしてくれると助かる」と叫び……その直後に腹を押さえて、蹲った。

当然、二人そろって駆け寄る羽目になる。

ヤヒヤーがすぐに応急処置を施す。情けない話だが、朱乃は例によって邪魔にならないように大人しくしているだけだった。

「便利なものだ……：：：仙女の力というのは。重症だが、重体ではない」

ヤヒヤーは血塗れの呉羽をそう評し、医者に連絡を取り始める。一方の朱乃はふともう一人の血塗れの仙女に目を向けた。

「……まだ彼女にも息があるわね」

「でも助からない」

呉羽は断定した。これも【空気】を読んだ上の発言なのだろう。

「……行こう。こんな女の最後を看取る必要はない」

声を絞り出したのはヤヒヤーだった。そして、呉羽を担いで歩き出す。

朱乃も呉羽も無言だった。しかし、次の瞬間、朱乃だけが振り向いた。

後ろ髪を引かれたのだ。文字通りの意味で。

——ねえ、あたしと一緒に来ない？

彼女の瞳はそう語っていた。

夢を見た。

朱乃が《阿青》と共に歩む夢だ。《阿青》が前衛で、朱乃が後衛——圧倒的な強さを誇るが、気まぐれで、ついつい前に出すぎてしまう《阿青》と、それを後ろで支える朱乃——二人でならどこでも生きていけると思った。

ところが、ある時、やけに手ごわい二人組と戦うことになる。極めて優秀な後衛と、《阿青》に匹敵する白兵戦技能を持った異様な前衛だ。しかし、そこで朱乃が新しい狙撃システムを持ち出す。《阿青》が隙を作ってくれたおかげで、朱乃は無事にその二人を射殺できた。

冷や汗をかいた朱乃は、面白半分に、その死体の顔を覗いてみることにした。

その一つはヤヒヤーの顔で。

もう一つは呉羽の顔で。

その日の目覚めは最悪だった。

呉羽の病室を訪ねてみると、そこは予想以上に殺風景だった。

設備としては上等なのだろう。質素だが清潔な寝台だ。

だが、そこには、呉羽好みの漫画とお茶が乱雑に並んでいるのみで——入院に付き物の花束や果物はまるで見当たらなかった。もっと言えば、他者が見舞いに来た跡がまったくない。いや、そもそも、呉羽がここに入院していることを知っているのは、この病院の関係者を除くと、自分とヤヒヤーだけなのかもしれない。

「朱乃？ 来てくれたのっ？」

「……入る前からわかっていたんじゃないの？」

呉羽なら【空気】を読み取れるのでは？——と朱乃は勘繰ったが、どうも違うらしい。

「いつもいつも【空気】読んでばかりじゃ、疲れるの。頭がガンガンしてくるんだよ」

その一言の意味を朱乃は推測した。

——件の【空気】が齎す膨大な情報量に脳の処理能力が追いつかない。だから、普段は抑制しているのだろうか？

考えてみれば、あの《阿青》は常にあの髪を解放していた。常に【空気】を読んでいた気配もあった。すべてが《呉羽》^{紅葉}より上だったらしい。それはわずかな時間でも頭痛を招く情報の奔流に、さらに深く身を委ねていたということになる。

——その結末があれ？ ……たまらないわね。

あるいは、彼女は呉羽と違い己の感染領域を抑制することが出来なかったのかもしれない。空気を読んでいたのではなく、読まないでいることが出来なかったのかもしれない。空気に逆らうことが出来なかっただけなら、それは能力というよりも疾患である。

——まあ、二つは往々にして、同じものだけだ。『反アスペルガー症候群』^{Anti-Asperger's Syndrome}ねえ。

暗澹たる気分になっていると、呉羽はあやすような声で言葉を続けた。

「朱乃が思っているほど、これは便利なものじゃないよ」

「そうなの？」

「だって、条件次第で観測精度も極端に変わるんだよ。未だに同じ学年のスリーサイズ一覧す

ら……」

「……呉羽？」

「……な、などというものを作っているわけではないけれど、仮に作ろうとしても、実に難しい……と思うよ。多分」

朱乃の視線が変わった事と呉羽の口調が変わった事には、やはり強い因果関係があった。

「そ、それに誤差もあつたりするんだよ」呉羽はあからさまに誤魔化そうとする。「あの、えーと、あの社会の先生。名前なんだっけ？ ほら、黒人で、ひよろひよろで、頭でっかちな顔で、いかにもマサイ族ってな感じの」

「オロポックル先生？」

「そう、その先生」

「そういう時は『すらりとした体軀に知的な顔立ち』と言いなさいよ」

悪気がないのはわかるが、少しは言い回しを政治的に正しくすべきだ。第一彼はマサイ族のような草原遊牧民ではなく森林狩猟採集民族の出自である。

「あの先生の後ろにね、仏像みたいな光背がくっ付いていた気がするの。十二本ほど」

「……………それは錯覚でしょう」

「まあね。そして、そういう事も珍しくはない。珍しくもないことだから、あたしは気にも留めていなかったし、だから、名前も忘れていた」

疑問…同級生の名前は丸暗記しているのに、どうして教師の名前はさっぱりなのだろう？

推測…どうせ、美少女がどうのこうのという理由で暗記しているからに違いない。

「……………」

……朱乃は自分が呉羽に毒されてきていると自覚した。

「とにかく、その位あてにならないの。ちよつと他人よりも勘がいいだけ。さすがに銃弾の軌道予測みたいな致命的な現象の解析には誤作動がないから、一定の安全装置があるみたいなんだけど……」

「いずれにせよ、その手のことはヤヒヤーに尋ねた方が手っ取り早そうね」

「……あ、朱乃、もしかして、あたしの事を馬鹿だと思ってる？」

「でも、それは随分後になるかな……彼今猛烈に忙しいみたいだし」

何せ、あれだけの死体が出来上がったのだ。事後処理だけでも大変なことになる。それでもヤヒヤーは『君だけでもあの学園に戻るようにする。約束する。……それとできれば、呉羽も』と東奔西走している。

その背中に朱乃は目指すべき大人の姿を見た気がした。

と、同時に呉羽が入院しているのに（その病院の手はずもヤヒヤーが整えたのだが）、ヤヒヤー一人で大丈夫なのかという不安が芽生えた。そのことを仄めかすとヤヒヤーは『問題ない。どの道、呉羽はこの手の仕事では役に立たんだよ』と空笑していた。

その背中に朱乃は仕事に疲れた大人の姿を見た気がした。

「……で、怪我の方は？」

朱乃がやや硬い声音で尋ねる。呉羽は話を逸らされた事を気にしつつも、質問には答えてくれた。

「う、うん。それは一週間以内に退院だって」

なんとあれだけの怪我が既にほぼ完治し、傷跡すら残っていないのだという。

呉羽曰く「綺麗に筋を貫かれていたからね。容易く肉を抜かれたけれど、逆にそれだけ傷の治りも早い。あれは真正正銘の化け物だった。多分、彼女なら、剣を振るいながら、雪を身に当てないようすらできるんだろうね」とのことである。

最後の一文は朱乃には理解不能であったが、おそらく【空気】を読む者に特有の観念的な表現なのだろう。

窓から風が吹いて、呉羽の髪が揺れて……そこで初めて気付いた。

あの時と違い、髪形はいつもの『仔馬の尻尾』だったが、しかし、その色はまだ薄いままだった。反射的に「ごめん」という謝罪の言葉が出る。

だが、いつものように呉羽は笑って許してくれる。

「問題ないって。すぐに自慢の黒に戻って、あたしの後ろでさらさら揺れてくれるよ」

「……」

そこで話題が途切れる。林檎でも剥いてやろうかと考え、朱乃が鞆に手を伸ばすと、上から声がかかってきた。

「……朱乃は何であたしに付き合ってくれるの？ ……あんな目にあつてまで」

呉羽は多少ビクビクしながら尋ねてきた。とはいえ、この質問の間合いは、呉羽なりの熟考故なのだろう。多分、【空気】とは関係ない。

だから、朱乃はゆっくりと息を吸って吐いて……そして答えた。

「——畢竟、私は青い鳥症候群だったのよ」

「青い鳥症候群？」

どうやら、呉羽はその用語を知らなかったらしい。きよとんとした顔をした。無理もない。

呉羽のような強い人間は、占いやら心理分析やらの宗教に救いを求めることはない。朱乃とは違うのだ。だから、他人の話に合わせることはするが、朱乃のように宗教用語を使ったりはしない。

「『青い鳥』っていう童話があるでしょ？」

「うん。モーリス・メーテルリンクだっけ？」

「その話の中で、主人公が探し回った『幸せの青い鳥』は結局自分の手近な鳥籠の中にいたでしょ」

「……うん？」

「そこから、転じて、身近な幸福に気付かずに、どこかに幸せがあるはずだと、こんなの本当

の自分ではないと、今そこにある現実からの逃避を続ける心理を、『幸せの青い鳥』を探し続けた主人公の心理に喩えて、『青い鳥症候群』というのよ」

「へー……って、それおかしいでしょ」

「勿論、現実には『本当の自分』なんて……」

「いや、そうじゃなくて」珍しく呉羽は話を遮った。「その単語を作った人、『青い鳥』を読んだことないんじゃないかな？」

「え？」

「その説明だと、まるで主人公——チルチルとミチルの二人組みだけ？ とにかく主人公たち——が自ら望んで旅に出たみたいだったけれど、あの話の中では、かなり嫌々だった気がするよ」

「……」

「大体、前提がおかしいじゃん。幸せは身近にあるなんて、ゆとりのある人間の台詞だよ。そりゃ、ある人はいいけどさ。ない人だったら、どうするの？ 今そこにある現実が自分にとって都合の悪いものだったら、そんな現実からは逃避するけどな、少なくともあたしは」

呉羽は多少憤慨したように言葉を重ねる。

「ま、よっぽど、奴隷根性が染み付いたヘタレ野郎なら、話は別だろうけど——でもさ、あの

『青い鳥』は一箇所にとどまった例がない。たしかに終盤では手近な鳥籠の中にいたけれど、結局、そこから飛び立っていった。あれこそ寓意でしょ。人間は幸せを『より自身の願望に近い本当の自分』を常に探さなきゃいけない。個人的には探さずに鳥籠の中にいてくれば楽でない——とは思うけど——作者は『世の中そんなに甘くない』って、釘を刺している」

「……意外と読書家なのね」と、朱乃は本心とはかけ離れた相槌を打った。「O・ヘンリーの

The Last Leaf
『最後の一片』も読破していたみたいだし」

「両方とも薄い本だったからねー。中学の時に読書感想文で真っ先に選んだの」

そう言って呉羽はケラケラ笑う。

結局、朱乃は原典を読まずに恥をかいたのだった。